

発行元
東京新聞
南千住東口専売所
TEL5850-3699
発行責任者
鬼塚 佳代子
TEL090-2657-0300

すまいるたん



汐入

第161号
平成22年

11月23日

ジョイフル三ノ輪
今昔物語
第1回

ジョイフル三ノ輪商店街の「ナガオカ」の五十嵐春雄さん（大正14〜平成19）の遺稿集「ジョイフル三ノ輪今昔物語」平成六年二月より

「温故知新」昔の人は実にうまい事を言ったものである。当商店街の成立する過程に就いては「三ノ輪橋界わい」で述べたが、その先人の方々が大正初期より昭和初期までに大体の店舗の形成に努力なされ現実に至るのである。その間、大正十二年の関東大震災に災害を受けず、又日中戦争・大東亜戦争にも被害を奇跡的に受けなかった。しかし、この災害が間接的に当商店街に商店の流出を促し、少しの流出もあつたのである。流出とは昭和十八年頃より米軍による空襲に備えての地方への疎開、又戦時企業統制令に依る営業不可能の店も出てきたからである。

昔に戻ろう。大正五年四月一日発行城北タイムズの新報紙上に「小生夢坊」という方が次の様に新開地について書いてある。全文では長くなるので抜粋して述べませう。

三ノ輪新開地―なんとという美妙的響きである。私は新開地に二度参つて居る。八百の戸数、いづれも新しき木の香する家、小さく立ち並んだ狭い家々にも大いなる前途の光明が輝いて見えた。武蔵野は、今日の東京を開いた。三ノ輪の未来はやがて、第二の浅草の繁栄を生み五十年、百年の後には、一つの都会を開くものであるかもしれない。新開地とは創造である。新開地八百の戸数のうち半ば銘酒店と聞く。新開地と銘酒店は付きものである」と云々述べている。

又この紙面で編集者は三ノ輪といったら誰も知るものもない位、であつたのは大正五年の十年前のことである

それもそのはぶ今でこそ、人通りも多いし、電車の停留場も出来て立派な町になって居るのであるが凡そ十年前迄は道も狭く、夜など薄暗い気味の悪い往来で家屋も失敬ながら、みすばらしい家ばかりであつて、今では誠に以つて見違える程、よい町になっていると書いてある。現在に於いても「ジョイフル三ノ輪」に買物に行つてくると云う人は案外少ない。「新開地」に行つてくると云う人が大半である。この人々は戦前から居る人達ではない。他の地よりの居住者方々でもある。それほど「新開地」は良い響であり、そこには歴史を超えた何ものかがあるであろう。

三ノ輪橋という王電が開通し駅が出来た事によつて新開地商店街が整備された事にも述べたが、昭和十七年秋から戦後食料、衣類等みじめな生活があつたが、朝鮮戦争が勃発が契機となり、田中角栄氏の列島改造論も発表され、好景氣を向え、昭和廿九年頃迄小売業者は安定した生活を得られたのである。昭和四十年頃より、そろそろ大型店の進出が現れ始め、我々零細企業への影響が徐々に圧迫となつて現れたが、各店の経営努力によつて現在のジョイフル三ノ輪が形成されているのである。

平成五年十二月初旬、高梨榊吉氏を訪れる。氏は現在満九十二歳になるが矍鑠として記憶力も抜群であり、昔の當地とうちを知る唯一人の方である。長時間に立ち話をお聞き致しました。高梨宅の前の荒川アパートは取り壊され更地になつていた。（平成七年一戸建四戸が建てられた）

ここは明治末期が大正初期に静亭という名で寄席又は芝居小屋を建てられたのである。後半、春木亭と名を変え席亭になつたのが松坂屋こと関口梅吉氏である。